

# 『中国、日本侵攻のリアル』

を読んで

柴田 幹雄 陸自75

ロシアによるクリミア併合とそれにつれて、世界は「戦争」の形態が一変したことに驚愕した。それは「ハイブリッド戦」と呼ばれる新たな戦争概念である。すなわち軍事力の強さだけではなく、情報操作や政治工作、経済的圧力などの非軍事的手段との組み合わせで戦争の形態が決まる。そしてそれは平時から有事へ無段階で進展していく。通信妨害、携帯電話を使った偽情報による攪乱、サイバー攻撃などで相手を無力化して一気に戦争を決着させてしまう。

あらたな防衛大綱及び中期防、元年版防衛白書でも宇宙・サイバー・電磁波の領域での能力向上に力を入れていくと述べている。だがその領域での能力向上で目指しているのは従来の戦力発揮の基盤確保に過ぎない。問題は宣伝、恫喝、フェイクニュース、マスコミ操作、謀略、テロなども含むあらゆる影響力行使が「戦争」の概念の中で行われるという認識を持っているかという事である。日本はハイブリッド戦

に対応できるか。

本書の特徴は、台湾の総統選挙に始まる中国のハイブリッド侵攻、これに連携する中国による先島諸島に対する同時ハイブリッド侵攻のシミュレーションを行い、その様相、そしてこれらの侵攻に対する日本政府による対応を記述しているところであろう。あたかもSF小説を読むような緊迫感と、誰をも得心させる現実味を、臨場感豊かに描いている。

「宮古島には、約300隻の中国漁船団から、燃料切れと水の補給を理由とした寄港許可が要請され、水産庁・沖縄総合事務局（中略）は人道上の観点からやむを得ず許可することとした。（中略）夜になり、各漁船からボートに乗り移った、漁民とは思えない黒ずくめの不審者たちは、宮古島海上保安部や漁協の監視の目を逃れ、（中略）重そうな荷物を背負って上陸し、迎えに出ていた学生風の男たちと夜の闇に消えていった。」なかなか読ませる筆致である。

備部隊長が家族を人質にされ部隊が武装解除されても、法制局の「中国による明確な武力行使が確認されていない以上、法理論上は防衛出動発令には無理があり。」。有事認定は誰がするのか、中国が認定してくれるのか。

このような苦境から日本はどう対応し、与那国島を奪回するのか、米軍はどうするか、台湾は、尖閣はどうなるのか。

本書の後半は、我が国、そして自衛隊のやるべきことを述べ、真に戦える組織に脱皮し国のために尽くすには、組織の垣根を越えて議論し、総理と防衛大臣のリーダーシップの下で改革を進めるきっかけを作るべきではないか。また、制服と内局の融合の促進、そしてシビリアンコントロールと自衛官の政治的発言についてなど、著者の長年の経験からの哲学も披露する。国際貢献の在り方、防衛産業の保護・強化と海外進出まで幅広く論を進めている。統合運用の更なる進化と統合司令部の必要性、そして統合的視点からの防衛力整備のための組織改革に言及しその具体策を記している。

に囲まれた日本は、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、我らの安全と生存を保持する」環境にないとする。加えて、自分の国を自ら必死に守ろうとしない、自ら最大限の防衛努力をしない国を、米国は絶対に助けに

述べている。

著者の岩田清文氏は、第7師団団長を経て、全自衛隊の運用を司る統合幕僚監部で統幕副長そして陸上幕僚長を歴任した。筆者とはCGS同期で、氏は最年少で入校してきた。俊才とはこういう人のことを言うのかと、最年長の筆者は妙に納得したことを覚えていた。その氏が陸幕長までの経験と識見、そして自衛隊と日本を想う愛国の情を持って書き上げた本書が面白くないわけがない。偕行社社員必読の書である。飛鳥新社 定価1500円（税別）（03-13263-7773）担当工藤（10冊以上の場合には2割引き）

**中国、日本侵攻のリアル**

自衛隊の最高警告

岩田清文

飛鳥新社

尖閣奪取！

香港、尖閣は、中国の領土に帰す。中国は、尖閣を奪取し、中国領と宣言する。中国は、尖閣を奪取し、中国領と宣言する。中国は、尖閣を奪取し、中国領と宣言する。